

## 亜宗教を信じる親について インターネット上で情報発信を行う動機

岩田紳吾

COVID-19の影響で亜宗教（陰謀論や疑似科学、スピリチュアルなど）の信奉者とそうでない人々との間で社会的な分断が生じ、特に親子関係にその影響が出ている。そして、亜宗教を信じる親を持つ人々がインターネット上でその不和を発信する現象が見られる。

Okdieら（2022）は、陰謀論を信じる人との関係の近さが対立の強さに影響することを示した。特に、フェイスマスクの効果否定やワクチンと自閉症の関連など具体的害がある可能性のある陰謀論に強い対抗意識を持つことが確認された。しかしながら、このような陰謀論との社会的関係を分析する研究は限られており、特に陰謀論者との間に緊密な関係を持つ人々に焦点を当てた研究は見つかっていない。このため、本研究では、親子不和をインターネット上で発信しようとする動機と、その後の親子関係に与える影響を探ることを目的とした。また、インターネット上で親に対する不和についての投稿を目にすることで、フィルターバブルにより、親に対するネガティブな感情が増幅されるのではないかとという仮説を立てた。

本研究では、半構造化インタビューによる質的調査を行い、インターネット上で自らの親について発信していた18歳以上の男女5名を対象とした。なお、あくまでも発信の動機を追求することが目的のため、使用したツールの種類は重要視しなかった。

調査の結果、匿名性が発信に踏み切る一つの心理的ハードルを下げる要因であることが明らかになった。一方、怒りや衝動など、共通の要因以外の動機は三者三様であった。また、ライフストーリーから、今回の調査対象者の親たちは、COVID-19の流行以前から亜宗教に興味を持っていたことが判明した。想定したフィルターバブルによる親への不満の増幅は見られなかったが、投稿を通じて亜宗教側の発信者に対する怒りが強くなる可能性が示唆された。これはCOVID-19の影響が薄れ、親の介入が減少したことで相対的に怒りが目立つようになったためであると考えた。また、他者の投稿による影響が限定的であったことは、発信者が既に客観的な距離を置いていたことが影響していると推察される。

結論として、動機は匿名性が共通の要因である一方、各個人特有の動機が見られた。調査対象者は、具体的な実害の発生やストレスが限界点に達した結果、発信に移ったと考えられる。また、親子間の心理的距離は発信以前と以降で変わらず、ストレスや不満は変わらなかったものの、亜宗教側の発信者への怒りは増幅される可能性があることが示唆された。

（指導教員 後藤嘉宏）